
緋弾のエリア～無為で無気力でチートな破壊神～

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜無為で無気力でチートな破壊神〜

【Nコード】

N6872U

【作者名】

燐

【あらすじ】

世界の残酷さを知ったアリアは破壊神の元を離れた

破壊神は理解した所詮アリアは人間だったんだと

絡み合った鎖は無情にも砕かれ二人を離してしまった

これは全てを破壊する神がもう一つの学園生活を通して人の何かを学ぶ。

アクションあり。

ラブコメディーあり。

の物語

緋弾のアリアく無為で無気力な破壊神く始まります!!!

「「見ないと風穴開けるわよ!」(ちゃっつよ)「「

第一弾（前書き）

燐

「やってしまった……緋弾のエリアを見ていたらやってしまった基本短く誤字誤字が多いと思いますが一層しくお願いします」

第一弾

空から女の子が降ってくると思う？

昨日珍しく帰ってきたルームメイトと映画を見ていたらそいつは呟いた

まあ、映画とかマンガならいい導入かもな
それは不思議で特別なことが起きるプロローグ
主人公な正義にでもなつて、大冒険が始まる

ああ、だからまずは空から女の子が降ってきてほしい！

……なんて言うのは、浅はかってモンだぜ

だってそんな子、普通の子なワケがない

普通じゃない世界に連れ込まれ、正義の味方に仕立てられる
現実のそれは危険で、面倒なことに決まってるんだ。

だから少なくとも俺、遠山キンジは

空から女の子なんて、降ってこなくていい

俺はとにかく普通に、平凡な人生を送りたい

だからまずは、転校してやるんだ。この、トチ狂った学校から……

……ピン、ポーン……

慎ましいドアチャイムに音で、目が覚める
枕元の携帯を見ると 時刻は、朝の7時

(こんな朝っぱらから、誰だよ……)

居留守を使おうとしたがああ、の慎ましさ(……)にイヤな予感が
する

もそもそ、と寝間着であるジャージから別の部屋に移動し制服に着
替える

ちょうど、ワイシャツをはおり制服のズボンをはいた時に扉が開いた

「……………誰？」

白く飾りっ気のないパジャマを着た。

一人の女性、彼女は完璧その二言、女神でさえ嫉妬してしまうような
容姿に一切無駄のないスタイル

腰まで伸ばした純金と勘違いしてしまいそうなほど美しい金髪にそ
の瞳は世にも珍しい銀眼をしている。

彼女の存在は見る人の魂でさえも奪っていきそうな程、神々しい

「うわ、いきなり入ってくるな空」

こいつの名前は夜天（やてん）空元^{そら}転装生^{チャンシ}の武偵だ

最初は男性として入学していたが

突如、理由は知らないが1ヶ月後に女性として再入学してきた

「多分白雪だろ」

「そう……」

ボタン、と扉を閉めボフツ、と再びベッドに倒れ込んだ音を確認するとまたチャイムが聞こえ溜め息を吐いた

夜天^{アブノーマル} 空は異常だ^{レザド}
アサルト^{スナイプ} 強襲科、狙撃科、^{ダキユラ} 諜報科、^{インケスタ} 尋問科、^{レプア} 探偵科、^{アムド} 鑑識科、^ロ 装備科、^{コネク} 通信科、^{インフォルマ} 情報科、^{メディカ} 衛生科、^{アンビュラス} 救護科……その全ての学科をあいつはSランク（……）だ

しかもあいつはそれ+魔法を使うことができる

本人は使うとつまらないからといった理由で使用することは少ないが俺は一度だけ強襲科にいたころ見せてもらったことがある

その時は山が一つ消えた

目を疑ったがあいつはその後消した山を再び戻す荒業も簡単にした

武偵高校にいること事態が異常な彼女はもちろん既に卒業単位も取得しオマケに授業免除も

世界中からその実力が認められあいつは日夜世界中を飛び回り犯罪組織や難事件を解決している

噂だがあの公安0課にスカウトされたことがあるとか……断ったらしいが

そんな神とも呼ばれる程の実力からして空はこう呼ばれている

【神威】の空と

「ふわあ〜」

大きい欠伸をし僕はベットの枕から一丁の拳銃を取り出す

【FN Five-seven】高い貫通力と人体に対する破壊力も備えている強力な銃だ

「着替えよ……」

今頃キンジは白雪とイチャイチャしているだろうなとか思いながら綺麗に畳んでいる防弾制服とその上に置いてある二丁の短機関銃【MP741】を取る

40発分のマガジンを両方にセットし防弾制服に手を掛ける

臙脂色と白色の制服に腰のホルスターに【MP741】を収め左手の袖に【FN Five-seven】を隠しベッドの下から刀で

ある【終夜】を横腰に携える

「今日から原作の始まり……か」

金山 キンジ原作だと結構不幸者でリア充な人。

あれ（・・・）が見たくて試しにタオルを付けて風呂に侵入したとき一瞬であれ（・・・）になって簡単に遊ばれたのは中々楽しい思い出だったな

「それじゃ、行こうか【アラストール】」

僕は一本のシーフナイフを取り出すその刃には顔は悪魔のようで羽は天使のような堕天使が何か祈るような絵が刻まれているそれを僕は太ももに巻き付けている鞆に収める

……この世界では使うことはないと思うけど何だか情が移っちゃったな。

さて もうすぐ始まる金山キンジと【緋弾】のARIAそしてその仲間が紡いでいく物語が……

第二弾（前書き）

燐

「完成！なので更新します。一応初戦闘になります」

第二弾

扉を開けると漆塗りの重箱の弁当を平らげ蜜柑を摘まんでいるキンジの姿が映った

「おはよう〜」

「おはよう、空」

「あ、おはよう空ちゃん」

同じ臙脂色の防弾制服を来ている女性は星伽 白雪

艶々した黒髪に前髪ぱっつん。目つきはおっとりとして優しげで、まつ毛はけふるように長く絵に描いたような大和撫子だ……あれがなければ完璧なんだが

「ふわあ〜。眠い」

「空ちゃんネクタイが曲がってるよ」

「ん、ありがとう」

白雪が僕のネクタイを器用に直していくキンジ君はラッキーだよ。こんないい幼なじみはギャルゲーの世界ぐらいだよ

それに……視線を落とせば高校生にしては発達しすぎのあれが深い谷間を作り勝負下着かと思ってしまうような……

「黒」

「へっ?。きゃっ!」

僕の視線に気づいた白雪が両手で胸を隠す

「よいではないか。よいではないか」

「きゃ、空ちゃん!、やつ、らめえ……きゃん!」

何をしているかって?

巨大な二つのもまんを揉んでいるんだよ。

いや、男なら犯罪だけど女なら戯れているように見えるからいいね
揉み放題だよ。ククク

「何も聞こえない。何も見えない。何も聞こえない。何も見えない。
何も聞こえない。何も見えない。何も聞こえない。何も見えない。
何も聞こえない。何も見えない。何も聞こえない。何も見えない……
…ブツブツ」

キンジはあれ(・・)にならないように必死で視線を反らして耳を
塞ぎ自己暗示している。面白いww

「それじゃ、……本番逝っちゃっ?」

答えは聞いてないけど

僕は大きく空いた谷間に手を……

バシッ!!

「調子に乗らないでください！……私の体はキ、キンちゃんの物なんだから！」

何処から抜かれた日本刀の鞘で叩かれた……痛い

あと、プロポーズ言うのはいいいけど本人には聞こえてないよ

「お前らあ………」

「おつと正義の味方が殺気出して怒り始めたので逃げる！ じゃあねえ〜」

マンガとかでありそうな走り方で僕はキンジの部屋を出た

ブーーン

「流れる。星屑は つか僕たちを追いかけていく、軌跡描きながら 遙か空の彼方へ」

只今僕は道路をバイクで疾走中

乗っているバイクの名前は【千足狼】

ある七つの剣使いの人が使っているバイクを僕なり作った最高傑作の一つさ！

いや〜、うん、かつこいいね〜

燃料は僕の魔力だから環境に優しいし最高速度は1225 km/h

……音速だぜ

けど僕以外の人が出したりしたらバラバラ事件になっちゃうし町中
で出したりしたら大惨事間違いなしだからね普通は50〜80 km
/hくらいがちょうどいいんだよね
これくらいだと風が気持ちいいしね

で

そんな僕の緩やかホヤホヤタイムを邪魔する屑はだれかな？

ダダダダダダダ！！！！

背後に僕をストーカーしてくる二台の車、その一台から突如人が窓から出て機関銃をぶっぱなす

狙いは僕

当たる義務なんてないから避けるけどね

「どこの組織かな？」

依頼とかで犯罪組織とか潰し回っているから逆恨みとか貰いやすいんだよね

……えつとあの豚のような鳥のような獅子のようなごちゃ混ぜシンボルは【キメラ】とかいう組織だっけ？

機関銃射つために身を乗り出したときに見えたんだけどね

「武偵法9条」

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない……なので今の僕は殺害禁止

はあ、殺すより殺さない方が難しいんだけどね

「まあ、後で勝手に死んじやたってことはいいんだけどねえ……！！！！！！」

カシャ、ガシガシガシガシガシ！！

前左右のパーツが外れそこから七つの柄、前の一番長い大剣を抜く

「focusing! (集束)」

掛け声と共に左右に納められた六つの剣が飛び出し僕の大剣とドッキングし……

「さあ、君達の鎮魂曲レクイエムを奏でな」

巨大で強固な大剣【フェンリル】へと姿を昇華させた

ギギギギギギ……!

【フェンリル】を地面に突き刺しそれを軸に一気に曲がりあいつらの方の正面へ向く

前の車は機関銃をぶっぱなし後ろの車はロケットランチャーを取り出す

「【神威】を嘗めるじゃないよ!」

【フェンリル】で弾丸全て叩き落とし発射されたミサイルはFN Five-sevenで撃ち落とす

爆風が起こり砂嵐が巻き起こり前が見えなくなるが相手は殺ったか思っているのか息が上がっている

だが残念、僕は生きているんだよね

前の車に斬撃を叩き込みその瞬間【フェンリル】を一つ分散させ後

ろの車に投擲する

ドガ ン！！！

そして爆発、エンジン部分狙ったからね僕が殺したじゃなくて車が
彼等を殺したんだ

だから僕は悪くない(……………)

「なんと、たわいの無い鎧袖一触とはこのことか……何てね」

汚い不協和音だった
まあ、一応追放してあげるけど………生きているならもう僕には関わ
らないでね

あ、剣一つ無駄遣いしちゃった後で補給しなくちゃ

「バイ、バ……イ」

と、僕は濃いガソリンの臭いを感じながらその場を外れた

僕はもう二つ名がある

一つは武偵としての尊敬と恐怖が込められた【神威】

そしてもう一つは犯罪組織とかから名付けられた血も涙もない武偵

【無慈悲】てね

さあ〜って、学校行くことよ

第二弾（後書き）

相変わらず容赦無いよね

空「僕の機嫌を悪くしたんだ当然の断罪だよ」

いや、武偵法9条……

空「殺害は人を殺す意味、僕は無効化を計ろうとし剣で車を刺してそれがたまたまエンジン部で運悪く爆発して乗ってた人が死んじゃた。うんうん立派な自衛行動じゃないか」

まるで戯言のような屁理屈だな

空「いいじゃないか。大丈夫、殺す気ではいたけど死んではない……
…答」

矛盾してるよ〜

空「それが僕の心理さ」

……疲れた次回もよろしくね〜

空「バイ、バ〜〜イ！」

第三弾（前書き）

燐

「待ちに待った夏休み！

その最初の投稿！

よければ感想など送ってもらえると嬉しいです！ではでは」

第三弾

この世界の現代は凶悪化する犯罪に対抗しある資格が新設されている
武装を許可され荒事を有償で解決する何でも屋

武装探偵

通称 『武偵』 ってね

ま、そんなことはどうでもいい僕が武偵になったのは彼を探すため
もう一度、もう一度彼に合って話したいんだ

(ふわぁ〜、眠)

屑を焼き払った後、僕は欠伸をしながら左手にエンブレムのシール
を貼る

自惚れている訳じゃないけど……アニカ戦姉妹のね採用要請が滅茶苦茶多
いんだよ……

とりあえず武偵高の中ではいつでも掛かってこい…… なんだけどし
っこいんだよね

いや、だけで断るのは流石に悪いし承認条件として左手のエンブレ

ムをとつたらいいよってことにしている

ま、とるつもりなんて一切無いんだけどね

「お。キンジ発見！」

何時ものように教務科に事件の報告を済ませて廊下を歩いていると
キンジを発見！

飛び掛かるの攻撃！

首に両手を巻き付けぶら下がる

キンジはいきなりのことこつちに倒れこんでくる

「うっ!?!。空か離れる!?!」

ジタバタ暴れるキンジに足を腹に回しガツチリ腕も蛇のように抑えてガツチリ固める

「そんなに暴れると僕はもっと痛め付けたくなるよ」

「ぐっ!この男女ドS!?!」
オカマ

そう僕は男女だ

今は女、必要があれば男に変化することが出来る

僕は人間じゃないからねそんなことは余裕のよっちゃん……でも本音は男寄り。

女になっっているのは彼等から目を背くため。

ちよっただけならいいけど長時間はかなりまずい

「って、いいながら男になるな気持ちが悪い！」

「嫌だな〜キンジ。僕は女だよ」

「今は男に変わっているだろ！」

「分かるかやっぱ」

やっぱり胸か〜女モードだとC位はあるんだけどな。

男モードは絶壁になる……当たり前か

何時も遊んでいるから（キンジで）もうバレるか

因みこのことを知っているのは……キンジと白雪くらいかな？

いや……キンジはともかくして白雪は危なかったよ知らないときは

睨まれるは虐められるは斬りかかれるはで大変だった

で、お話し合いとある物を渡したら捕虜にしてくれたよ……うん、で

も下手のことしたら容赦なく首が飛ぶことになるけど

「おい！。いい加減離せ！」

おっと、思考に深くしすぎたのかキンジを縛ったままだった

体を元（女）に戻し僕はキンジを解放する

「……なんでお前がここに居るんだ？。俺より先に行ったはずだろ」

「いやね……そこら辺の三流テロリストに逆恨みされてね……」

「ちよ、大丈夫か!？」

「ん?。はあ、キンジ君。失望しゃうよ僕の辞書に敗北なんて言葉はない(……………)」

「あゝ、そんなことは聞いていないんだけどな」

「とりあえず半殺し程度にあしらったよ」

「おい、武偵法9条」

「じゃ、武偵憲章3条」

武偵3条『強くあれ。但し、その前に正しくあれ』

僕は僕なりの正しい(……………)ことをしたに過ぎない
人の感情が千差万別あるとおんなじ

「はあ……。まあ頑張れよ。色々……と」

どこか哀れみを感じるキンジの溜め息

確かにこんなことは正直珍しいことじゃない

色々恨み買うようなことしたり武装検事にも睨まれたことあったし

……まあ、時には小国沈めたことあったし……おかげで非公式、
最年少でRランクを取得したよ

因みにこの世界ではこれでRランク取得者の8人目だ

流石にこれはこの学園では片手で数える程度しか知らない

非公式なのは僕がまだ学生だから大抵Rランクは首脳や王族の専属
武偵になるんだけど……まあ、大人の事情って奴だね

「……お……い……おい！」

「はぁ！」

また考えすぎたみたいだ気づけば教室の前、隣には困った顔をする
キンジの姿

「あ、すまんすまんじゃ、入ろっか」

隣で文句一言、二言呟き僕とキンジは教室に……新しくクラス分け
された2年A組に入った

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

新しいクラスの最初のHRで睡魔に身を任せるとしたときアニメとかで聞きそうなアニメ声が聞こえ目を開ける

目に写ったのは小学生クラスの背丈をしたピンクツインテールの少女……確か神崎・H・アリアだっけ？

一年の三学期ごろにこっちに留学して確か強襲科Sランク

たしかこの世界のヒロインだったね

前回とは違った原作知識はキャラクター位しかないんだよね

と、イスから転げ落ちるキンジを見ながら思う
因みに僕はキンジの席の後ろだ

「よ……良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！おれ、転入生さんと席代わりますよ！」

ほんとにこいつ高校生かと疑うほどの長身なツンツン頭の男の名前は武藤剛気

車輛科のAランクかなり優秀だ

「キンジ、これ。さっきのベルト」

ワーワー。パチパチ。

教室は拍手喝采

そのなかで神崎・H・アリア気にもせずキンジに貸したであろうベルトを放り投げていた

「理子分かった！ 分かっちゃった！ーこれ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

キンジの左隣に座っていた少女が立ち上がる

蜂蜜色の長い髪に小さく結ばれたツインテール

神崎ほどではないが背は小さいがその分、胸が大きい

そっちに栄養がいったようだうん、山田ティーチャーを思い出すね。性格は全く違うけど

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！これ、謎でしょ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

彼女とは結構仲がいい……と思う。

まあ、趣味がおなじだったから絡み始めたって漢字だけどね

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！

そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり二人は

熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

と、理子の声が聞こえる頃には僕は机に頭を落としていた

クラスの生徒達がキンジに陰口（もろ聞こえだが）をBGMにし瞳を閉じ始める……恋愛……か

そのあと、二つ鳴り響いた二発の銃声
少しイラッとしたが睡魔の甘い誘惑に負け再び目を閉じる

意識が飛びそうな時に聞こえたのは神崎が武偵高のみんなに発した
最初のセリフだった

「風穴あけるわよ！」

第三弾（後書き）

緋弾のアリアX『禁忌の双極』（アルカナム・デュオ）発売おめでとう！

「なんていうか……あれだね」

うん。凄いキャラが出たね

「流石の僕も少しは苦戦するかも……」

……少しなんだ

「それにしても包丁手にキンジを押し倒した時……」

……ああ、あれね

「スクール・デイズの最終話のシーンが頭に浮かんだね」

うん。あ、死んだこいつとか最初は風魔が殺害フラグたっちゃったかななんて思ったけど

「……いいの？こんな話して」

大丈夫じゃないよ。そもそも五巻位までの段取りは考えてはいるんだけど……10巻見て更に頭を抱えることになった

「ま、どんな奴が来ようとも敵ならば踊らさせ奏でさせて終わり……だね」

……我ながら恐ろしいチート主人公を作ったもんです

「チートじゃなくてバグだと思っただけだな……」

それよりあの黒雪をどうやって手懐けたの？

「ん？まあ……白雪の写真とキンジの写真をパソコンにデータとしてインプットして場所は教会にキンジには燕尾服を白雪にはウエディングドレスを着せ変えてヴァージンロードを歩く合成写真を創って渡しのお近づきの印として」

……結果は？

「血沼が出来たとコメントしよっか」

……ああ、なるほど

「因み今は頼みで和風バージョンを創作中だZE」

……

「勿論まず場所は星伽神社で……」

ああ、もういいです。

なんとなく先が読めます

でも、それで仲良くなっただんですね

「うん。そんな感じ。たまに料理とか一緒に作ったりもするから結構仲がいいと思う」

へえ〜、まあ後書きはこれくらいにして次回をお楽しみに

「僕が活躍するのはもう少し先だね」

……元々やる気ないだろうが

「バレちゃった」

もう一つの始まり『紫色の色金』(前書き)

燐

「外伝ぽいなにかです。
何となくで作りました。どろどろどろどろ」

もう一つの始まり『紫色の色金』

「……俺は生きているのか」

ザーザーと雨が降る痛いと思うほどの水粒が身体を叩き付けられていく。

俺はここにいるのかいないのかそんな当たり前のことが分からないほど今の俺は衰弱しきっていた

裏切られていない。ただあいつは真実を隠されていただけ。

……ただこの巻き起こる衝動はなんだ？

苦しくもない

悲しくもない

嬉しくもない

だったらなんなんだ？

……分かっているだろう？

内なる自分が問いかける。……答えは出ている。

だがそれを受け入れることはできない。あいつはいままで俺に何を恵んでくれた？

希望をくれた

力を授けてくれた

手を貸してくれた

……だが、あいつはお前をもてあそんだ。あいつが創る運命に

お前は何もできず身を任せた・・・その先になにがあった？

・・・

————黙視しても何も得られねえよ。お前はあいつが憎いんだ（
・・・）

・・・

————あいつに従いお前は絶望を知っただろ？

・・・

————ならばどうする？そのまま逃亡生活を送るのか？

・・・

————俺は嫌だね。喚くことできないお前は負け犬以下だ。

・・・

————お前はアイツを守るため強くなった。だがそれは奴を殺すためでもあるだろ？

・

————あの女からの贈り物だ。あいつは生死の概念がない時期固定もされ神なのに神殺し武装も効果がねえ。

————この力を使ったとしても殺せても死なせることは出来なえ

が吹き飛ばすぐらいが出来るはずだ。さア、とツと立てそれ以上しけた顔してみる散らすぞ（・・・）？

・・・多分この巻き起こる感情は怒り（・・・）なんだろう。全身の血が逆流するように猛威を振るいなぜ、なぜ、なぜ？と激動を繰り返す

『その調子です。主』
マイ・マスター

突如目の前に現れる。黒の中でも目立つ黒をした彼女は手の中から紫色に煌々と輝く何か（・・・）を差し出した

『これは紫紫色金私の力そして主の負が結晶化した新たな存在・・・それは森羅万象を飲む込む闇そのものと言っても過言じゃありません』

紫紫色金「ししいろかね」と呼ばれたそれはまるで我が家に帰るように俺の身体の中に入って行った。それと同時に稲妻が走るような激痛が体中を駆け巡るが歯を噛みやせ我慢をする

『あなたが私を拒絶しようが私はあなたを一生愛しあなたが私に振り向いてくれなくても私はいつもあなたの傍に・・・』

「・・・ありがとう。ティシフォネ」

彼女は俺の頬に唇で簡単に触れ頬笑みながら左目の眼帯の中に入っていた

「・・・鬱陶しいな」

夥しい雨に打たれそれが鬱陶しく感じたとき体中の力が指先に集中していく。それと同時に俺の髪は黒く闇色に染まり。右目の蒼色の眼は紫に多分、隠している左目の紅色の眼も紫になっているだろうが黒雲の空に手を向ける紫色に紫電し螺旋を描きながら莫大なエネルギーの繭を作りだした

「・・・紫紫色金

「―――」
「紫天」

その瞬間、引き金は引かれた天を穿つような閃光は文字通り空を消し飛ばし黒雲に風穴を開ける

「・・・いい、天気になったな」

空を覆い隠していた雲は晴れ強烈な日差しが目を刺激する

「さて・・・行こうか」

どこいくかまだ分からない。だが自分の意思でこの無の未来を歩んでしまった。・・・これは仮初の自由、今の俺じゃあいつに簡単に捕まってしまう。

もっと、もっと、力がある・・・もっと、もっと、自分の運命を作ることが出来るぐらいは・・・

そして、零崎 紅夜は歩み出した。しっかりと地面を蹴り上げ自分の来るであろう偽の未来を打ち砕くために・・・

もう一つの始まり『紫色の色金』（後書き）

空

「紫紫色金……厄介だなあ〜」

これぐらいのチート武器がないと相手にならないかもしれないからねえ

空

「ねえ、作者僕には色金はないの？」

……はあ？これ以上チートにしてどうしろと？
忠枝さえ君チート越してバグなキャラだよ

空

「ないのか……残念」

当たり前だ。ボケ

空

「じゃ、帰りま〜す」

あれ？どこ行くの？

空

「……手がかりそう言い残しておこうか。じゃあね」

はあ……まあ、いいか次回から本編に戻ります。ISの方を更新できたらこっちも更新したいと思います。ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6872u/>

緋弾のエリア～無為で無気力でチートな破壊神～

2011年10月6日17時31分発行